The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オリンピック関連記事にみられる国家意識の変容
Author(s)	永吉, 希久子
Citation	年報人間科学. 2006, 27, p. 87-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25864
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オリンピック関連記事にみられる国家意識の変容

永吉希久子

〈要旨〉

本稿の目的は、日本人の国家に対する意識がどのように変化しているのかを分析することにある。この際、オリンピック関連の新聞記事において、「国家」や日本人選手がどのように描かれているのかに注目する。近年、オリンピックが喚起する集合的アイデンティティの基盤は国家から、人種、民族などに移り変わってきているといわれる。しかしこうした議論は、旧植民地国家や多文化国家を対象としたものであり、「単一民族神話」が根強い日本においては状況が異なっている。本稿では、一九八八年、九二年、九六年のオリンピックに関する新聞記事を、コンピュータ・コーディングを用いて分析し、以下のようなことがわかった。一九八八年では「国家」は「国民」を抑圧する対象として否定的に捉えられていた。九二年になると、「国家」は国際的な舞台で颯爽と活躍する選手たちによって象徴されるようになる。そして、九六年になると「国家」や「日本」という概念自体の使われる頻度が下がり、代わりに日本人選手が家族やチームといった親密で小さな共同体の支えの中で苦難を乗り越える姿が描かれるようになる。国家が集合的アイデンティティの基盤としての役割を失いつつある中で、日本では民族や人種という概念がリアリティを持たないために、「家族」や「チーム」など失われつつある親密な共同体への回帰が起こっているのである。

キーワード

ナショナリズム、エスニシティ、オリンピック、計量テキスト分析、新聞記事

1. はじめに

二〇〇四年のアテネオリンピックにおいて日本は史上最多のメダルを獲得した。テレビでは連日試合の結果が伝えられ、金メダリストの言葉は流行語大賞にもなった。オリンピックだけではない。ワールドカップではそろいの青いユニフォームを着て「ニッポン」を応援する人が街にあふれ、日本語ブームが巻き起こった。香山（2004）はこうした「日本が好き。だって日本人だから。」という意識を「ぷちナショナリズム」と名づけ、「ラディカルなナショナリズム」に転換していく可能性を示唆している。こうした分析のなかでは、日本人選手たちに声援を送り、「ニッポン」を連呼する人たちの姿から、全体主義的なものが想起されているのである。

オリンピックという場はナショナリズムを論じること自体がタブーとされる日本において、それが許される場である（佐伯 2001:59-65）。つまり、オリンピックでは、普段意識されない、あるいは意識していたとしても表現することの許されないナショナリズムが現れるといえる。しかし、「ニッポン」の連呼は本当に日本への帰属感の表明だといえるのだろうか。同じ日本人選手への声援であっても、時代によっておかれている文脈は異なるのではないだろうか。「思想が受け入れられる際には、言葉の読み替えが行われる」（小熊 2002）のだとすれば、同じ言葉が使われているからといって、以前と同じ思想が共有されているとはいえない。そこで本論では、オリンピックに関連する新聞記事の記述の変化をたどり、オリンピックについての記述に現れる「国家」の意味づけがどのように変化してきたのかを分析する。

2. オリンピックとナショナリズムの関連

2・1 ナショナリズム研究の現状

ナショナリズムについての研究には大きく分けて二つの立場がある。一つは、アンダーソンやゲルナーら、国民（nation）とナショナリズムを近代社会の産物であるとする「近代主義者」、そしてもう一つは、国民とナショナリズムは恒久的であり、それらは自然なもので、歴史状況に左右されないとする「原初主義者」である（Smith 1986=1999）。「集合的な文化的紐帯と感情が極めて古いものである」という「原初主義者」の見解は間違いではない（Smith 1986=1999）。しかし、その文化的紐帯が、多くの見ず知らずの人々を含む「国民」という単位を採ったことへの説明には不十分であり、また、近代的諸条件が変化したことによってナショナリズムが変化するという視点を採りえない。実際の社会状況を見れば、大戦中のファシズムの台頭、冷戦下での南北の対立、ソヴィエトの崩壊と各地での民族主義の高まりなど、時代に応じて国民と国家の関係は変化しており、国民が国家に向ける感情も異なっていると考えられる。つまり、「近代主義者」の議論の方が有効であるといえる。

近代主義者の一人、ベネディクト・アンダーソンは、国民を、本

来的に限定され、かつ主権的なものとして想像された、「想像の政治的共同体」であるとした。それは、言語によって「想像」された共同体である。我々は自分の国の大半の人と面識を持たないにも関わらず、限られた国境を持つ国民を想像している。そして、その国境の向こうには他の国民がいる（Anderson 1983=1997:24-5）。こうした想像の共同体を生み出したのは、資本主義、印刷技術などのコミュニケーション技術、そして、人間の言語的多様性という宿命性のあいだの相互作用であった。そして、「国民」は「モジュール」となり多様な土壌に適応していったのである。ここで「国民」は「皮膚の色、性、生まれ、生まれた時代など―ひとがいかんともしがたいすべてのものと同一視される」（Anderson 1983=1997:236）ものとして扱われている。

しかし、このアンダーソンの議論は活字メディアの発達が国民（nation）という概念の発生に与えた影響に焦点をあわせたために、口頭でのコミュニケーションなどその他のメディアが与える影響について、過小評価する結果となった（Wogan 2001）。活字メディアが国民を想像することを可能にした一方で、国家を愛し、そのために死ぬことを可能にしたのは口頭でのコミュニケーションである（Wogan 2001:404）点や、当時活字を読める人はごく少数のエリートに限られていたという点を考慮にいれると、こうした活字以外のメディアが果たした役割は重要であるといえる。つまり、活字メディアの機能だけでは、一般の人々が「国家」や「国民」に対してどのように感じていたのかについては充分に説明できないのである。

一般の人々の国家や国民に対する意識を高めたのは、むしろ旗やパレードなど視覚に訴える媒体である（Marr 1986）。そして、オリンピックもそうした国家に対する心情や、国民国家のなかでの「われわれ」という意識を促進する上で有効な媒体であるといえる（Tervo 2002, Heagreaves 1992）。そこで、次節では、オリンピックと国家の関連をより詳しくみていく。

2・2　オリンピックにおける集合的アイデンティティ

オリンピックと国家の関連を論じる多くの研究(1)が明らかにするように、オリンピックは長らく国威発揚の手段として利用されてきた。オリンピックが「参加することに意義があるものであること」あるいは、「個人間で競うものであること」が強調されるようになったのは、オリンピックと国家の結びつきが強くなったことの反動であると考えられる（Hargreaves 1986, 日本オリンピック委員会 1994）。こうしたオリンピックと国家との結びつきは、第二次大戦後も東西陣営政治の中に持ち込まれ、組織的なドーピングの使用やボイコットという政治戦略がオリンピックにおいて推し進められた（アイヒベルグ 2004:42-3）。

しかし、メディアが発達し、スポーツの商業化が進む中で(2)、オリンピックは「国家」の威信を高めることとは異なる文脈の中でも機能しはじめる。その一例といえるのが、メキシコオリンピックで二人の黒人選手が行った、反人種差別のアピールである。

この大会は、衛星技術による世界同時中継がはじめて可能になっ

た大会であり、国対国を基本とした「インターナショナル」なイベントであったオリンピックが、空間と時間を縮減した形で「国」を超えて世界中に広がる「グローバル」なイベントとなったはじめての大会であるといえる。この大会でメダルを獲得した二人の黒人選手、トミー・スミスとジョン・カルロスは、アメリカ国歌が流れ、星条旗が掲揚される場面、つまり「ナショナル・ヒーロー」として自らがたたえられる場面で、国旗から目をそらし、黒いグローブをつけた握りこぶしを突き上げた。彼らの人種差別に抗する運動は、「オリンピックの持つ特徴それ自体を媒介にしながら、既存の国民や民族といったものを超えたより広範な集合性を、その内部に生み出していった」(山本 2004:219)。スポーツは黒人にとって上層への移動を可能とする数少ない分野であったが、そこでも「黒人は白人と比べて知性の面で劣る」などの偏見から、チームプレイの競技においては周辺的なポジションにしかつけないなどといった差別が存在していた(Sailes 1991, Frey and Eitzen 1991)。こうした状況の中で、「国際的なレベルの(黒人)選手たちは、国の威信が賭けられたときだけ自分たちが積極的に白人社会に要求されるという矛盾につきあたって」いた(山本 2004:223)。そして、「国の威信」とは別の文脈の中に自分たちのパフォーマンスを位置づけることで、「国家」を超えた集合性を示したのである。

また、「国家」という大きな単位がソヴィエトの崩壊によって分解したことをきっかけに、ソヴィエトに限らず世界の全地域において、より小さな民族という単位がスポーツにおいても日の目を見るようになった。たとえば、バルセロナ大会においてはカタロニアの「部族的」アイデンティティ・ポリティクスが支持され、ケルトの国々は自分たちのスポーツ・アイデンティティを発展させている(アイヒベルグ 2004:42-5)。

しかし、オリンピックの場における「人種」や「部族」を基盤とした新たな集合性の表象は、必ずしも「部族」やマイノリティとなる人種の側からの、つまり、「下から」の運動だとはいえない。例えば、オリンピックを招致するためには他の都市との差異を強調することが重要となる。そのために、他の都市とは異なる「多様な伝統」を「作り上げ」、「発明」するという場合もある(Nauright 2004, 町村 2000)。シドニーオリンピックではアボリジニの文化が強調されたが、それはあくまでセレモニーとしてであり、オリンピックの競技にアボリジニの身体運動(たとえばブーメランの投擲)が含まれることはなかった。アイヒベルクはこの点を指摘し、シドニーオリンピックでアボリジニのアスリートであるキャシー・フリーマンが聖火台に火を点したこと、そして四〇〇メートルで優勝したあとオーストラリアの国旗とアボリジニの旗両方を振ったことに触れ、次のように述べている。

「私たちのキャシー!」と、オーストラリアのメディアは見出しをつけ称賛した。だがそれは誰のキャシーについて語っていたのだろうか?そしてそのときの「私たち」とは誰なのだろうか?いったい「私たち」とは誰なのだろうか?(アイヒベルグ 2004:

50)

ここでみられるように、現在のオリンピックにおいては、かつてのような国家を基盤としたものとは異なる集合性が存在する。グローバリゼーションの結果、「選手」は「選手」、「自分」は「自分」という「個人主義的スポーツ観」(村田 1982) が広がったのではなく、「人種」や「部族」など、これまでの「国民国家」を超えた集合性に自己同一化の対象を見つけたのである。

オリンピックにおける集合的アイデンティティはいまだ存在しており、人々はオリンピックで活躍する選手たちの姿に、「私たち」という集合性を見出している。その「私たち」が誰なのかは、語る人によって異なるだろう。では、敗戦によって帝国主義が否定され、その結果として単一民族神話が国民に広まっている (小熊 1995: 339-61)日本で、自分が「日本人」であることを疑うことなく生きる「中心的日本人」(高橋 2000) にとって、オリンピックの場面での「私たち」とは誰なのだろうか。前述したように、これまでオリンピックでの「がんばれニッポン」の連呼は、国家を基盤とした集合性の表象として捉えられてきた。以下の章では日本においてオリンピックという場で「国家」の位置づけがどのように変化したのか、「国家」がいまだ集合性の基盤となりえているのかについて検証する。

3. オリンピック記事に見られる国家の位置づけの変化

3・1 分析の手法

本論では、計量テキスト分析(川端 2004)という手法、なかでもKH-Coder[3]という計量テキスト分析ソフトを用いて、新聞記事を分析する。これまで、オリンピックに関する研究においても、ナショナリズムに関する分析においても、新聞記事の量的分析は行われていない。しかし、計量テキスト分析という手法は実証的かつ柔軟な分析が可能となるという利点を持っている。例えば、こちらが決めた回答の中から調査対象者が答えを選ぶ調査票による調査とは異なり、新聞記事上の表現そのものを掬い取ることができる。これによって、「民族」や「国家」などといった言葉の使われ方がどのように変化してきたか、ということをより具体的な形で検討することが可能となる。思想の変化を受けて言葉の読み替えが行われている場合に、ある言葉の出現数の変化やおかれる文脈の変化を把握できる計量テキスト分析は有効な手段であるといえる。さらに、数的処理を行うことにより、一部の客観性が保証される[1]。

また、新聞というメディアは公共的参加を促す告白形態をとっており、活動し作用し合っている共同体の内幕話を生み出す (McLuhan 1965=1987:207-21)。つまり、新聞は「集団的態度を形成したり暴露することに専念」(McLuhan 1965=1987:217) しているといえる。したがって、新聞記事を分析することで、社会の中で形成されてい

る意識や態度を知ることができると考えられる。

分析対象となるのは、朝日新聞データベースCD-ROM八八年版、九二年版、九六年版から、「オリンピック」「五輪」のキーワードで検索できた記事六三二一サンプル（内、八八年四九〇サンプル、九二年二一一〇サンプル、九六年三七二二サンプル）のうち、今回の研究の趣旨であるオリンピック関連記事から外れると思われるサンプル[5]を除いた四八五四サンプル（内、八八年三七〇サンプル、九二年一五三一サンプル、九六年二九五三サンプル）である[6]。

「国家」の位置づけの変化をみるという趣旨からいえば、より長期間のデータを集めることが好ましかったが、時間と手に入るデータの制約があり、今回はこの三つの年に限定して分析を行った。八八年、九二年、九六年はそれぞれソウル大会（夏季）とカルガリー大会（冬季）、バルセロナ大会（夏季）とアルベールビル大会（冬季）、アトランタ大会（夏季）が行われた年である。ただし、九四年から夏季オリンピックと冬季オリンピックを別々の年に行うことになったため、九六年には夏季オリンピックしか行われていない。

3・2　データ全体の傾向

オリンピック関連記事に見られる「国家」の位置づけの変化を分析するが、まず注目すべき点は、「オリンピック」「五輪」の語が含まれる記事の量の差である。記事の総数としても、前述したように八八年から九二年で一六二〇個、九二年から九六年で一六一二個記事が増えている。つまり、九六年は夏季オリンピックについての記事しかないにもかかわらず、八八年、九二年よりも多くの記事が書かれているのである。これは九六年においてオリンピックへの関心が強かったことを示している。

次に、これら三つの年で、「国家」や「愛国心」など「国家に対する意識」と関連する言葉が出現する割合に変化があるのかを調べるため、コードを作り、そのコードの出現頻度を調べた。新聞記事へのコードの付与は、以下のようなコーディング・ルール[7]にしたがっている。

「国家」というコードは普遍的な概念としての「国」を表す言葉（「国家」及び「国」）を集めたもので、一方、「国民」は「日本人」を指す言葉（「日本」＆「国民」（「日本」と「国民」が記事の中にともに含まれることを意味する。以下同様）など）を集めたものである。ここで普遍的な概念としての「国民」コードを作成しなかったのは、「国民」という語が、どこかの国を想定しない普遍的なものとして扱われることは少ないと考えたからである。「日本人選手」コードは「日本から出場した選手」を表す言葉（「日本選手」、「日本勢」など）を集めたもので、「国威」コードは国家の象徴や国への愛情の表現として扱われるもの（「日の丸」、「愛国心」など）を集めた。また、「民族」コードは、日本民族という概念（「日本」＆「民族」など）とが含まれる記事を取り出すために用いたコードである。

そして各コードの出現率[8]の変化を調べたところ、図一のようになった。ただし、この際の集計は「記事」単位で行っており、以下の分析も同様である。図一では、四角の重なりが多いほど、また

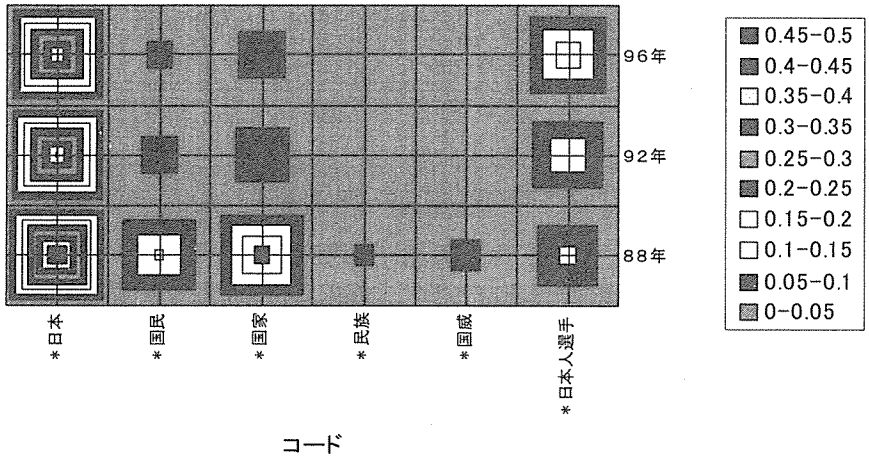

図1　各コードの出現率の変化A

重なりが同じならば四角形の大きさが大きいほど、出現率が高いことを表している。図一からわかるように、「日本」の出現率は若干の減少は見られるが、全体的に他のコードに比べれば著しく高く、出現率はすべて四〇%以上になっている。「国家」、「国威」、「国民」、「民族」は、減少の傾向にある。このうち、「国家」、「国民」、「民族」は八八年から九二年にかけて特に大幅に減少しており、「国家」では十三・四ポイントの減少がみられる。ここから、オリンピックについて語る際の「国家」や「国民」といったものの位置づけが、八八年から九二年までの間で大きく変化したと考えられる。また、「国家」や「国威」とは逆に、「日本人選手」は徐々に増加していっている。つまり、オリンピックについて書かれる際に、「国威」や「国民」との関連で書かれる傾向から、「日本人選手」そのものの動向について書かれるようになってきているといえる。また、「民族」という文脈で語られることは少なくなっており、集合的アイデンティティの基盤として「民族」がとられるようになる、という流れはここではみられなかった。

このことから日本においては「国家」だけでなく、「民族」を基盤とした集合性も失われてきていると考えられる。しかし、個人を指す「日本人選手」という言葉も、彼らに「期待する」という文脈で用いられるならば何らかの集合性がそこに投影されているといえる。したがって、これらのコードがどのような文脈で用いられているのかを調べる必要がある。そこで、上記の各コードがどのような語とともに使われているかを、KH Coder のコード間関連コマンド[9]

を用いて調べた。そして、これらの語からさらにコードを作り、各コードの出現率の変化をグラフに表した（図二）。

「期待」というコードは、選手に対して「メダル」や「勝つ」ことを「期待」する、また、それがはたせず「残念」とか「ふがいない」という記事（「金メダル」＆「期待」など）、選手が期待を背負って「重圧」を感じているという表現（「重圧」、「プレッシャー」など）が含まれる記事、さらに「国民」が「関心」を持っているという記事を選び出すためのものである。一方、「活躍」というコードは、選手の活躍を伝える言葉（「進出」、「マーク」など）を集めた。「自分のもの」というコードは、オリンピックを個々の選手のものであるとみなす「個人主義的オリンピック観」を表す記事（「選手」＆「もの」や「自分」＆「こと」が含まれる記事など）を選び出すことを目的としたものである。「選手の心」というコードは選手の「気持ち」や選手の発言を記した記事（「心」や「涙」、「信念」が含まれる記事など）を選び出すことを目指している。「楽しむ」というコードは、オリンピックに「参加」することに「意義」があるとするものや「気楽」に参加している様子を表す言葉（「晴れやか」、「のびのび」など）を選んだ。「指導者」というコードは「指導者」および「師弟関係」を表す言葉（「コーチ」、「恩師」、「まな弟子」など）を、「外国人選手」は日本以外の国の代表選手を指す言葉を、「周囲の人」は「日本人選手」の親戚や友人、知人を表す言葉を集めたものである。また、「育成」は選手の「育成」に関する言葉（「選手」＆「強化」など）を集めたものである。「思

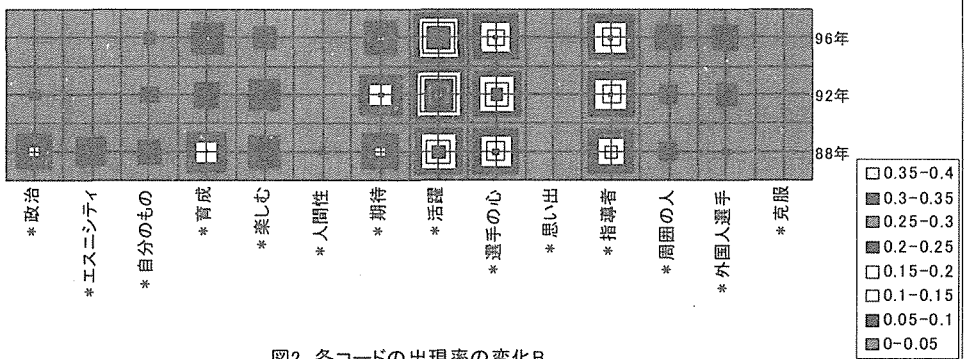

図2　各コードの出現率の変化B

い出」は選手の過去についての表現（「高校生」&「ころ」&「日本人選手」コードなど）を集めたもので、「エスニシティ」は人種や民族を表す語（「在日韓国・朝鮮人」、「日系人」、「アイヌ」など）を集めたものである。「克服」は「困難」の「克服」や、そこからの「復活」を描く記事（「ケガ」&「乗り越える」など）を選ぶことを目的としている。「人間性」は人間性をほめる言葉（「前向き」、「ひたむき」など）集めたコードである。また、「政治」コードは「政治」という言葉が含まれる記事を選んでいる。

図二に示したように、八八年に最も高い出現率を示しているコードは「政治」、「エスニシティ」、「育成」、「自分のもの」、「人間性」、「楽しむ」であり、「活躍」、「期待」、「選手の心」は九二年に高い出現率を示している。また、九六年には「指導者」、「周囲の人」、「外国人選手」の出現率が高いことがわかる。図には現れていないが、「思い出」は九二年が一・三一%でもっとも高く、「克服」は九六年が四・八一%でもっとも高い。この結果からも「エスニシティ」についての意識が社会の中で高まっているとはいえないことがわかる。

以上から、八八年には、「国家」や「国威」、「政治」、「民族」など、集合的なアイデンティティの基盤となる概念が記事の中で多く用いられていたことがわかる。また、九二年には選手に対する「期待」について語られることが多く、九六年には「日本人選手」やその「指導者」など、選手とその周囲の個々人に関する記述が多くなっている。このような各年の記事の傾向をより詳細に把握するため、上記のコードをさらに組み合わせて、【「国家」対「個人」】、【「日本人選手」の活躍】、【身近な人とのつながりの強調】という三つのコードをつくった。これらのコードの出現率の変化を表したのが図三である。

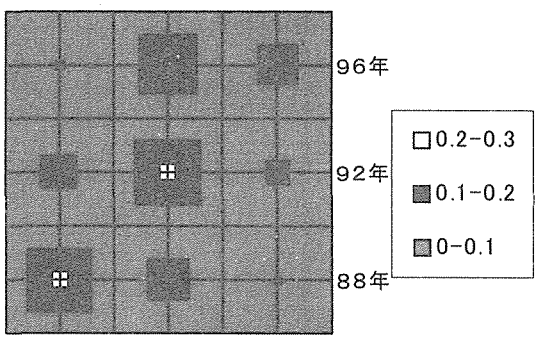

図3　各コードの出現率の変化C

【「国家」対「個人」】とは、「国家」による選手の育成や「政治」の関与を否定する記事、およびオリンピックや競技は「自分（選手）

のもの」である、という文脈の記事を選ぶことを目的としたコードである。

【「日本人選手」の活躍】とは、「日本人選手」に「期待」し、その「活躍」を伝える記事、および、選手が「楽しんで」いる様子を、「国家」との対比でなく伝える記事を選ぶコードである。

【身近な人とのつながりの強調】とは、日本人選手が「国威」や「国家」といった規模の大きい集団ではなく、「指導者」や「周囲の人」といった身近で小さな集団とのつながりの中で、苦難を「克服」する姿を描いた記事を選ぶことを目的としたコードである。

【「日本人選手」の活躍】は、出現率がもっとも少ない八八年でも一五・九五%と高い値を示しており、三つの年に共通して現れている。特に九二年に高い出現率を示している。【「国家」対「個人」】は、八八年の出現率が二三・五一%ともっとも高く、その後、徐々に出現率を減らしている。逆に【身近な人とのつながりの強調】は八八年から九六年の間に出現率を四・九ポイント増やしている。以上のようなコードの増減に注目しつつ、コードが与えられた記事の内容を具体的に見ていく。

3・3　一九八八年―「国家」の否定と「日本人選手」への期待

一九八八年の記事の特徴は、「国家」と「個人」を切り離している点にある。一九八八年には「国威」というコードが多く現れている（図一）。しかし、これは決して積極的な意味で使われているのではなく、否定すべきものとして使われている場合が目立つ。たとえば四月二日の天声人語では、首相の諮問機関が作った答申書が、「オリンピックでいかに金メダルをとるかを追求した」ものであることに触れた後、「けれども、スポーツ『大国』をめざし、メダルの数を『国力』に結びつける発想は、そろそろ卒業してもいいのではないか。（中略）**走るのは個人だ。国家が走るのではない。**」（強調は筆者による。以下同様）と書いている。

また、九月十八日の社説では、「たかがスポーツ、されどスポーツ。まなじりを決することはない。勝ち負けは重要だが、それより大事なのは、過剰な期待の荷を負わせず、選手にベストを尽くしてもらうことだろう。**また日本の選手は、なにより自分のために競技してほしい。企業や国家の名誉のため、などと無用な責任感、悲壮感をいだく必要はない。**ロサンゼルス大会で日本選手が獲得したメダルはいくつだったか。そんな質問に即答できる国民は、めったにいないのだ。」とある。

こうした意見は記者のみのものではなく、十月四日の投書欄では、「私は自分の国の選手を応援するのに反対なのではなく、往々にして、報道が国粋主義的応援に変質させられていることに強い危険を感じているのだ。選手名が国名に代えられ、その調子が高まるにつれて、国内の世論も、国家エゴを容認する度合いが高まったのではないか。私はマエハタガンバレに、熱烈な拍手をした一九三六年当時の日本人の心を何が捕らえていたのかを思うとき、スポーツと政治との、深いかかわりあいを考えないわけにはいかない。」という意見が寄せられている。

しかし、こうした意見はあくまでスポーツやオリンピック全体に対する理念なものであり、具体的な競技の話になると、「とくに背泳ぎの鈴木大地選手が一六年ぶりに水泳の金メダルを日本にもたらし、茶の間も大いに盛りあがった。これからの女子バレーや柔道、マラソンにも期待がひろがっている。『大切なのは勝つことではなく、参加することだ』という。**しかし無気力な負けかたをする「参加」組に、つい腹が立つのも事実なのだ。**」(九月二六日社説)というように、「メダル」を「期待」するという態度がとられる。特に、日本が得意とする競技においてはその傾向が強い。

つまり、「国家」が選手に期待を押し付けることに否定的でも、「わたしたち」が選手にする期待には無頓着であるのだ。以上のことから、一九八八年にオリンピックを見る視点は『『個人』とそれに対立する『国家』』であったといえる。選手は「国家」を背負うのではなく、「個人」として「自分のため」に競技に参加する。つまり、「選手」と「国家」は切り離されている。また、応援する「わたしたち」もまた「国家」に操作される可能性のある存在、つまりは支配的・政治的な「国家」に従属する存在なのである。

3・4　一九九二年―新しい「日本人選手」と「日本」像

一九九二年には、「国家」は個人や国民の集合体として表現される。一九九二年には、選手の心情や様子、特にその変容について伝える記事が目につくようになる。たとえば、二月二十日の記事では、「複合の金メダルトリオは表彰式で、シャンパンを抜き、派手に騒いだ。一夜明けた一九日朝、選手村では持ち込んだダルマに目を入れて大騒ぎ。**『今回のように伸び伸びしている選手は初めて』と日本オリンピック委員会(JOC)の職員が様変わりに驚く。**(中略)かつてサラエボ五輪で失敗したスピードの黒岩彰(現専大監督)は、単身で海外遠征に出掛け、精神力を養った。悲壮な姿は近寄りがたい雰囲気だった。**今の若手には海外レースを楽しんでいる感じさえする。**」とある。また、翌二月二一日の投書欄には、「アルベールビル冬季五輪大会での日本人選手の活躍に、今までのオリンピックにはない**明るさと軽やかさ**を感じる。とくに男子複合団体で金メダルを獲得した三ケ田、河野、荻原三選手の、**屈託のないさわやかな笑顔は、かつての日本のオリンピックメダリストとは次元の異なる輝きを放っている**ように思える。」という投書が掲載されている。

「日の丸」や「君が代」についての見方も変わる。「いまでもオリンピックで金になれば、日の丸が揚げられ、君が代がながれる。それを憎しみをもって見る人はいないだろう。過去をいつまでも引きずって生きるのは、惨めではないか。大事なことは、過去にこだわるよりも、日本がどうやって国際貢献していくかである。過去に心は痛むが、これを越えねば先へ進まない。**私は日の丸を美しい紋章として受け止めている。**」(八月二十日投書欄)という記事や、「その前半ジャンプで、荻原らはほっぺたに日の丸をかき込んで飛んだ。現場で取材した我々は、競技が終わって近寄るまで知らなかった。顔に絵をかいて五輪で競技するなんて聞いたことがない。あっぱれな**新人類ぶり**というほかない。(中略)**重圧どこ吹く風でのび**

のび飛んだ若者たちの、意表をつくほおの日の丸は、新世代の誕生を痛感させたものだ。」（一二月一七日）という記事にそれは現れている。

つまり、一九九二年には、「国家」の意味づけは変化しているといえる。「国家」がその影をひそめ、「選手」が前面に押し出される（図一）。「国家」はもはや「個人」や「選手」を支配するような存在として想定されていたりはしない。いまや選手のあり方が「日本」をあらわしているのである。彼らの明るく軽やかな振る舞いや国際性が、新しい「日本」を象徴することとなる。そして、「日の丸」も「国家」の歴史を思い起こさせるものではなく、いまの「日本」のシンボルとして新たな意味を付与される。つまり、「選手」や「個人」の総体として「日本」が描かれるようになっているのである。

3・5　一九九六年―支えの中で苦難を乗り越える「選手たち」

一九九六年には、人間的魅力を持った「日本人」の姿が表現され、「国家」としての「日本」は表象されなくなる。この年、前述したように「日本人選手」についての記事が多くなっている（図一）。それも「期待」の対象というよりは、「指導者」や「周囲の人」たちに支えられて苦難を「克服」する物語の主人公として描かれている。

有森裕子選手の銅メダル獲得を受けて書かれた記事では、前大会での銀メダル獲得後、精神的にも肉体的にも「燃えつき」ていた有森選手の復活のきっかけを次のように伝える。

「有森選手はここで、忘れられない光景に出合う。病院で、お年寄りたちが黙々と歩いていた。変形性股（こ）関節症で歩けなくなり、人工の股関節を埋め込む手術をした人たちだ。『歩こうと努力することはすばらしい』と思った。『練習すればまた五輪で走れる私は幸福だ。私は何をしているんだ』」（七月二九日）そして有森は復活する。この記事の最後には両親とのエピソードも書かれる。「今年五月、有森選手は高地トレーニング中の米コロラド州ボルダーから両親にはがきを出した。『七月二十八日、とても暑いアトランタで、すべてを味方に最高の走りをすることが母さん、父さんへのプレゼント』と書いた。銅メダルで、その約束を果たした。八万人の大観衆の中に、両親の姿を見つけた。涙の母は、娘の大好きなヒマワリの花を贈った。」

また、柔道の中村三兄弟の次男、三男がメダルを獲得したことについての記事では、三人の「兄弟の絆」がメダルの獲得の有無よりも強調して描かれている。「長男の中村佳央(よしお)選手だけはメダルに手が届かなかったが、三兄弟を知る地元・福岡の人びとは『長男のリーダーシップがあったからこそ、三兄弟はここまでやれた』と口をそろえる。両親を助けて家業を手伝い、弟たちの世話もする。メダルの陰には兄の支えがあった。佳央選手が小学六年生のときに家業のスーパー経営が苦しくなり、小さな青果店から再出発した。佳央選手は、練習の合間をぬっては父親とともに露店で野菜を売ったという。弟たちの高校の入学式や卒業式には、仕事に追わ

れる両親に代わって佳央選手が出席した。（中略）昨年十二月、講道館杯で三兄弟がそろって優勝したとき、叔父の藤秀利さん（五一）は『おまえたち、そろってアトランタに行けるかもしれんなあ』と話した。佳央選手が一番うれしそうな表情をしていたという。弟たちの成長が喜びだったに違いない。」（七月二七日）

こうした記述の中で選手たちに期待されているのは、メダルではなく、人間的な魅力である。

「実際、選手たちは自分の能力を磨くことだけで精いっぱいかもしれない。**しかし、トップにのぼればのぼるほど、注目され、その厳しい戦いを勝ち抜いてきたオリンピック選手としての人間性の質が問われることになる。**オリンピック大会での最終ゴールは金メダルを取ることではない。**重要なのは、「いかに戦ったか」であり、「どう生きるか」なのである。**」（七月六日）「**民衆は孤独な個人としての選手が、いかに勇ましく、きびしい試練にたちむかったか、その姿、そのプレーそのものに共感するし、日々を生きる勇気も与えられる。**」（七月五日投書欄）

選手だけではなく、彼らを支えるマネージャーの頑張りも記事は伝える。「アトランタ入りしてからは特に『精神的にいい環境作りを手伝おう』と選手の気分転換を気遣った。自室を開放して話し相手になり、日本語の雑誌や本を買い集めた。毎日、睡眠時間は三、四時間と必死だった。（中略）とはいえ、疲れが吹き飛ぶようなうれしいことも数多くあった。同じ世代の平中秀子選手（二三）は、トップスイマーの心の内を教えてもらい、悩みを打ち明けられる仲になった。五輪が終わり、手渡された手紙には『森下さんがいてくれて、本当に良かった』とあった。念願のシャペロンを務めた感想は『大変なことも多かったけれど、やっぱり楽しかった』。」（一二月二五日）

ここでは、「孤独な個人」である「選手」と、影で彼らを支える人々の温かなつながりのイメージが伝えられている。「国家」や「国威」に関する言葉は減り、彼らに期待をかける国民の存在もほとんど記事に表れてこない。それに代わって、一生懸命に生きる「日本人選手」とそれを支える家族や友人、指導者らの姿が描かれるのである。ここで描かれるのは、華々しく活躍する姿ではない。むしろ、人々が「厳しさ」や「苦しさ」を乗り越えて「努力」する姿や「ひたむき」に取り組む姿が強調されるのである。

4．考察

オリンピック関連記事の分析をまとめると以下のようになる。一九八八年には、「国家」と「個人」は切り離されており、「国家」は「個人」を支配する可能性のある、権威的なものとして見られている。しかし、一九九二年には、「国家」は出現回数を減らし、代わりに「選手」つまり「個人」についての記述が増え、その姿が「日本」の象徴として扱われるようになる。さらに、「日の丸」や「君が代」も「敗戦」あるいは「侵略戦争」という意味ではなく、「国際性」の象徴として新たな意味を与えられるようになっている。そ

して、一九九六年になると「国家」についての記事はほとんどなくなり、「選手」について、あるいは選手を支える家族や指導者についての物語が多く見られるようになっている。そこでは、彼らが苦難を乗り越える姿や人と人とのつながりが描かれている。

一九八八年は第二の戦後にあたる。この時代において、日本はすでに管理社会化した先進帝国主義国家であり、「国家」は彼らを抑圧する所与の体制であった（小熊 1995:583）。また、一九八八年のオリンピックはソウルで行われたのであるが、この際、南北共同開催を行うかどうかで議論が重ねられた結果、朝鮮民主主義人民共和国は不参加となった経緯がある。したがって、「スポーツが政治的に利用される」という話が新聞でも何度も取りあげられており[10]、自分たちを抑圧する対象としての「国家」という印象を持ちやすかったと考えられる。

一九九二年は、日本人の国家に対する意識の変容がメディア等で伝えられはじめた時期にあたる。湾岸戦争において日本の「国際貢献」がどうあるべきか、という話題がメディアでもたびたび取りあげられ、それまでタブー視されてきた憲法九条改正の問題も話題になりはじめた（Takeishi 1996）。つまり、一九九二年は「敗戦国」としての「日本」の自画像を捨て、新たな自画像を模索しはじめた時期にあたるといえる。一九九二年の記事の中で、日の丸や君が代が戦時中の軍国主義ではなく、「世界に向けての開かれたメッセージ」の象徴として描かれるようになったように、この年の記事では「新世代」とか「国際性」といった言葉が強調されている。

例えば、冬季オリンピックでのスキーノルディック複合で団体男子が勝利した様子は、次のように描写されている。

「日本の三人が各国の選手、コーチらに祝福される。英語で外国テレビのインタビューに答える河野。三人の表情は不思議なほど冷静だった。（中略）精神的要素に左右される面が大きいジャンプで「最高の出来」（池上三紀・ＳＡＪ複合部長）を実現したかれら三人は、プレッシャーに弱いと言われ続けた日本選手像とは無縁だ。本番のジャンプの合間に、顔見知りの外国選手と談笑する余裕さえあった。（中略）国際化時代の新世代の、あっけらかんとした感じさえするさわやかな勝利だった。」（二月一九日）

英語が堪能で、プレッシャーに強く、世界を舞台に「あっけらかん」と勝利する「日本人」の姿は、この時代が求める新たな「日本人」のあり方を表したものであろう。軍国主義の反省を受け、「平和主義」に自らのアイデンティティを置いていた段階を過ぎ、国際社会の中でどのような位置取りをするのかに迷う中で、選手たちが堂々と国際社会の一員となっている姿に、「日本」という国の姿を重ね合わせてみていたのである。

こうした「新しい日本人像」は一九九六年にも高い頻度で描かれている。しかし、一九九二年に選手を描く際に強調されるのが彼らの「国際性」であったとするなら、一九九六年に強調されるのは、彼らが「苦難」を身近な人たちの支えの中で乗り越える姿である[11]。

一九九〇年代の日本では、日常を生きるうえでのリスクが顕現し、これまでとは異なる形態でのコミュニケーションが広がる中で、「家族」や「倫理」のあり方が変化しているのが明らかになりつつあった（山田 2004）。そのような状況で求められたのは、「日本」を背負って世界で活躍するヒーローではなく、身近な人たちとのつながりの中で懸命に生きる「日本人」の姿であったのだ。そして、この身近な人たちで構成される共同体は、「日本」までは広がらない。あくまでも家族やチームといった小さな範囲のものである。

スティルマン（2003）は、難民や移民となったパレスチナ人の新たな「ディアスポリック（diasporic）」なナショナリズムの特徴として、家族を中心とした身近な個人についての語りが、共同体のエートスの主要な要素となっていることをあげている。「ヒーローは叔父や父親に、神話はそこにいる誰かから聞いた話に、とってかわられる。そして、黄金の時代は、祖父母に属している」(Stillman 2003: 18) のである。九六年の記事は、こうしたパレスチナ人の言説と似た傾向をもっている。もちろん、日本とパレスチナではおかれている状況は異なる。日本にはいまだ領土があり、日本人が「ディアスポラ」の民であるとはいえないだろう。しかし、八八年、九二年、九六年の記事が示すように、日本人にとっても「国家」の意味づけは移り変わっている。一九九二年には「選手」の姿は新しい「日本」の象徴として描かれていたが、一九九六年に描かれた「共同体」は「日本」を象徴してはいるとはいえない。「日本」はもはや選手たちや国民を抑圧するような対象ではない。また、選手や国民が世界の一員としての「日本」を作り上げているのでもない。「日本」はより小さな「共同体」の延長上にかすかにあるものに過ぎないのである。

グローバル化が進む中で、国民としての「埋め込まれた団結 (embedded solidality)」は、民族や言語や文化に根付いた共通性にとってかわられる (Stillman 2003:18)。しかし、日本の持つ政治的・歴史的背景が、「民族」や「人種」など、新たな共通性へのアイデンティティの移行を阻む。日本は、植民地支配の過程で、部族の生活圏を無視した国境線を引かれたり、分割統治でエスニック集団間の差異を拡大するような措置を施されたりした経験を持たない。また、遠隔地の諸民族を労働力として移入された経験もなく、遠隔地域に進出することも、被支配地域の独立後まで人的移動がなされるほど密接な関係を築くだけの長期支配を行ってもいない（小熊 1995: 403）。オリンピックの新聞記事の中でも、「民族」や「人種」という概念は八八年から九六年の間に出現頻度を減らしており（図一、図二）、日本においては民族も、人種も、アイデンティティの基盤となるだけのリアリティを持ちえないでいる[12]ことがわかる。そして、「国民国家」の文脈から切り離されたアイデンティティは家族やチームといった身近で親密な共同体へと帰属する場所を移している。

同じ「がんばれニッポン」という声援の中にも、時代によってこめられている意味は違う。したがって、日の丸のペインティングをして、君が代を歌う若者たちを見て、若者の右傾化を危ぶむのは、

早計にすぎるだろう。少なくとも一九九六年の時点では、人々は日の丸への畏敬や国家への愛情から日の丸をつけた選手に声援を送っていたわけではない。人々が選手に重ね合わせていたのは、旧来の共同体が失われつつあることが顕在化する中で、「孤独な個人」であることが自覚された「自分」である。そして、家族やチームといった親密な共同体の物語を生産し、消費することで、なんらかの安らぎを得ているのだとしたら、それは「国家」への回帰ではなく、むしろ、より小さな「ゲマインシャフト」への報われることない回帰であるといえるだろう。

【注】

(1) たとえば、Frey and Eitzen (1991) は大きなスポーツイベントが国内に存在する人種やジェンダーなどの差異から目を背けさせ、国内の統合を促進するとともに、よい成績を修めることで、自国の近代化や政治的な正当性や人々の解放の度合いが他国に比べて秀でていることを示す役割を果たすことを指摘している。

(2) スポーツ社会学においては、オリンピックを商業主義との関連で分析しているものが数多くある。例えば、Frey and Eitzen (1991)、Naurright(2004)を参照。

(3) KH Coderとは、二〇〇一年に樋口 (2004) によって開発されたコーディング・プログラムである。日本語を扱える数少ないソフトウェアの一つであり、無料でダウンロードし、利用することができる。このソフトウェアでは、形態素解析を用いて日本語のテキストを分割し、ある統計量を用いてその文章に特有の特徴語を抽出することができる。また、SPSSへデータを出力する機能も持っている。本論では、計量テキスト分析を用いた分析のうち、景山 (2004) や秋庭 (2003) を参考にした。

(4) もちろん、この手法にはデータが少ないと労力の割に報われない、言葉の曖昧さや文脈を理解できない、という欠点もある。詳しくは、川端 (2004) 参照。

(5) データベース上に本文のないもの、「リクルート疑惑」「歩けオリンピック」「歩け五輪」「デザイン博」「オリンピック記念青少年」「ハイビジョン」「数学オリンピック」「トトカルチョ」「大阪湾」「駒沢オリンピック」「就職五輪」「パラリンピック」「英会話学校」「外資系」「テレビ朝日」「〈社告〉」「オリンピックスポーツ」「現代詩」「演劇」「電子マネー」「日本ハウジングローン」「バレリーナ」「サラサヤンマ」「牛歩戦術」「絵画」「新刊」「ＯＥＣＤ」「技能五輪」「オリンピック青少年」「大阪港」「(イベント)」「デジタル」「五輪真弓」「選挙」「甲子園」「文化赤十字」「一芸入試」「シンザン」「電機業界」「原子炉」の語を一つでも含むもの、名前、メダル数、記録の羅列部を除外した。

(6) 朝日新聞を用いたのは一般紙の中で普及率が比較的高く、また、思想傾向としても革新的とされる場合が多いため、「国家主義」的でない層のナショナリズムが反映されていると考えられるからである。朝日新聞の読者層については、都市部の高学歴、ホワイトカラー層の割合が高く、思想傾向としては革新的である割合が高い（木村2004)。したがって、記事内容もこうした読者の傾向に合わせたものとなっている可能性は否定できない。

(7) コーディング・ルールは、語そのものというよりも、概念やカテゴリの出現数を数えるために用いるものである。詳しくは、樋口 (2004) を参照のこと。今回分析に用いたコードの詳しいコーディング・ルールは紙幅の都合上記載していない。詳細をお知りになりたい場合は、個別にご連絡ください。

(8) 出現率は、そのコーディング・ルールに当てはまる記事が、その年

のサンプル（オリンピック関連記事）の中で占める割合を示している。

(9) 先に示した「日本」「国家」などのカテゴリと、同じ記事の中で出現している場合に「共起」しているといい、共起が多く起こっているほど語とコードの関連は強いといえる。

(10) 例えば、「政治の重圧、カネと利権をめぐるすさまじいまでの商業主義にまみれて激変しているオリンピック」（一月一日）と言う表現や、「もちろん現代のオリンピックには、金メダルの数ばかり争う大国主義、テレビ放映料や企業まるがかえ選手といった金権主義など、矛盾や問題が山積している。しかし、それも政治的イデオロギーにもとづくボイコットを解決しての話だ。」（一月一三日）という記事が、例として挙げられる。また、図二で示しているように、「政治」という言葉が使われている頻度も八八年がもっとも多い。

(11) 一九九二年のバルセロナオリンピックでのメダル獲得総数が二二個だったのに対し、一九九六年のアトランタオリンピックでは一四個だった。つまり、メダルを獲得すること自体が少ないことにより、日本人が「軽やかに」勝利する姿を描くことも一九九二年に比べて困難だったと考えられる。しかし、文中に引用している記事にあるように、たとえメダルを獲得した選手に関する記事であっても、「軽やか」に勝利するというよりは、苦労を乗り越えつつなんとか勝利したという描写が多いことは注目すべき点である。

(12) 小熊他（2003）は、日本に広がる「草の根ナショナリズム」の特徴として、「在日コリアンへの露骨な差別というよりは、その存在と境遇にたいする拍子抜けするほどの無知」をあげている。ここからも、現代の日本において「民族」という概念がリアリティを持つものではないことがうかがえる。

【文献】

秋庭裕．2004.「澄んだ音、とらわれのない心―あるファゴット演奏家に見る霊位向上」川端亮編『社会調査における非定型データ分析支援システムの開発』平成一三年度～平成一五年度科学研究費補助金（基盤研究（B)(2)）研究成果報告書:83-100

Anderson, Benedict. 1983. *Imagined Communities.* Verso Edns.（=白石隆・白石さや訳．1997.『増補　想像の共同体』NTT出版）

アイヒベルク，ヘニング．2004. 有本健訳.「グローバル・ポピュラー・インター　ポピュラー」『オリンピック・スタディーズ』せりか書房:32-53

Frey, James H & Eitzen, D Stanley. 1991. "Sport and Society". *Annual Review of Sociology.* vol.17:503-22

Gellner, Ernest. 1983. *Nation and Nationalism.* Cornell University Pr.（=加藤節監訳．2000.『民族とナショナリズム』岩波書店）

Hargreaves, John. 1986. *Sports, power and culture.* Basil Blackwell, Oxford（=佐伯聰夫・阿部生雄訳．1993.『スポーツ・権力・文化』不味堂）

――― 1992. "Sport and socialism in Britain". *Sociology of Sport Journal.* vol. 9:131-53

樋口耕一．2004.「KH-Coderを用いたコーディングの実践」川端亮編『社会調査における非定型データ分析支援システムの開発』平成一三年度～平成一五年度科学研究費補助金（基盤研究（B)(2)）研究成果報告書:35-56

景山佳代子．2004.「メディアの中の性風俗―週刊誌『アサヒ芸能』を手がかりにして」大阪大学人間科学部平成一六年度博士論文

川端亮．2004.「計量テキスト分析」川端亮編『社会調査における非定型データ分析支援システムの開発』平成一三年度～平成一五年度科学研究費補助金（基盤研究（B)(2)）研究成果報告書:1-12

川本信正．1978.『スポーツナショナリズム』大修館書店

香山リカ．2004.『ぷちナショナリズム症候群』中央公論新社

木村雅文．2004.「現代日本の新聞読者層」『JGSS研究論文集』:59-75

クーベルタン，ピエール・ド．1962.大島鎌吉訳.『オリンピックの回想』ベースボール・マガジン社

村田豊明.1982.『ゆれ動くスポーツ観』新泉社

Marr, David G. 1986. "Review — Imagined Communities : Reflections on the origin and Spread of Nationalism". *The Journal of Asian Studies.* vol.45 (4):807-8.

町村敬志. 2000.「グローバリゼーションのローカルな基礎—『単一化された想像上の空間』形成をめぐる政治」『社会学評論』vol.50 (4):556-69

McLuhan, Marshall. 1965. *Understanding Media: the extensions of man.* Macgraw-Hill.(=栗原裕・河本仲聖訳. 1987.『メディア論』みすず書房)

Nauright, John. 2004. "Global games: culture, political economy and sport in the globalised world of the 21st century". *Third World Quarterly.* vol.25 (7):1325-36.

日本オリンピック委員会. 1994.『近代オリンピック100年の歩み』ベースボール・マガジン社

小熊英二. 1995.『単一民族神話の起源』新曜社

———2002.『民主と愛国』新曜社

小熊英二・上野陽子.2003.『癒しのナショナリズム』慶応義塾大学出版会

佐伯啓思. 2001.『国家についての考察』飛鳥新社

Sailes, Gary A. 1991. "The Myth of Black Sports Supremacy". *Journal of Black Studies* vol.21(4):480-7

Smith, Anthony D. 1986. *The Ethnic Origins of Nations.* Basil Blackwell, Oxford (=巣山靖司他訳. 1999.『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会)

Stillman, Todd. 2003. "Family Stories as National Synecdoche—From Personal Hardship to National Project in the Palestinian Diaspora". *Submission to the American Sociological Assosiation 2003 Meeting Atlanta,GA*:1-22

高橋哲哉. 2000.『歴史／修正主義』岩波書店

Takeishi, Chikako. 1996. "Japanese National Identity in Transition". *International Sociology* vol. 11(2):239-68

Tervo, Mervi. 2002. "Sports,'race' and the Finnish national identity in Helsing in Sanomat in the early twentieth century". *Nation and Nationalism.* vol. 8(3):335-56

Wogan, Peter. 2001. "Imagined Community reconsidered—is print capitalism what we think it is?". *Anthropological Theory* vol.1(4):403-18

山本敦久. 2004.「レポルト'68—黒人アスリートたちの闘争とアウターナショナルなスポーツ公共圏」『オリンピック・スタディーズ』せりか書房: 218-33

How do Japanese People Feel about the Nation: Analysis of the Articles about the Olympic Games

Nagayoshi Kikuko

This paper aims at analyzing what Japanese people identify themselves with, focusing on the Nation. Many researchers argued that people identify themselves not with their nations but with their ethnicities or their races in these days. In fact, it must be true in the post-colonial nations or in the multi-cultural nations. However, it should be considered more carefully if you analyze the case in Japan, for many Japanese still believe that Japan is the "homo-ethnic nation". I analyze articles about the Olympic Games with the computer-coding.

As a result, I found the following things. In 1988, Japanese people thought that the Nation restrained them, so the concept of the "nation-states" had a negative image. In 1992, Japanese athletes who easily won the game were regarded as symbols of "New Japan". The number of the articles includin the concepts of the "nation-states" were decreasing while the number of the articles about the athletes who try hard with the supports of their family members or their team-mates is increasing. In conclusion, the nation-based identity is now disappearing even in Japan. However, the concepts of "ethnic" or "race" is still not practical for most of Japanese people. Therefore, Japanese people regain small and close communities like families or teams as objects they identify themselves with.

key Words : nationalism, ethnicity, the olympic games, computer coding, newspaper articles